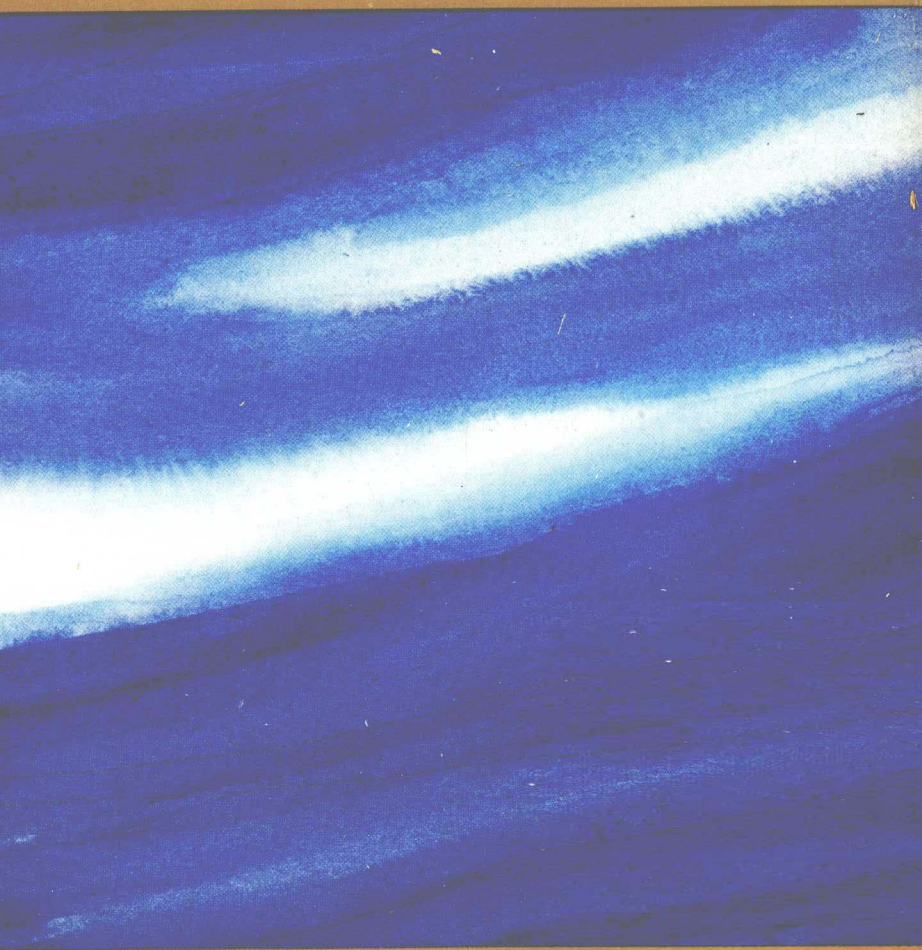


三浦綾子

帰りこぬ風



帰りこぬ風

浦綾子

序 章

一月十七日 土曜 晴 風強し

今日はなぜか、一日淋しかった。淋しさとは一体何なのだろう。何がわたしを淋しがらせるのだろうか。原因のない淋しさというものは、へんに不安なものだ。

夕方、勤務が終わって帰る時、急に広川さんの顔を見たくなって、二号病室に寄ってみた。

「千香ちゃん。どうしました？ 淋しい顔をして」

広川さんは、書見器を横にまわして、わたしの顔をじつと見た。ああ、わたしは人にもわかるほど、淋しい顔をしていたのだ。

広川さんはたしか二十八才だから、わたしより六つ年上のはずだが、ずっとずっと年上のような感じだ。何となく、人の心を安らがせるふしぎな雰囲気を持っているからだろうか。

「何を読んでいたの」

わたしは広川さんの書見器をのぞきこんだ。

「モーリヤックのバリサイ女さ」

「モーリヤックが好きなのね」

広川さんは、フランス語でモーリヤックを読んでいた。

「うん」

「バリサイ女って、なあに？」

「そうですねえ、いつてみれば、自分は他の人より正しいという意識が、強すぎる女のことかな。人間はみんな、バリサイびとですよ」

広川さんのそばにいてだけで、淋しさが消えた。

「広川さん、毎日臥ふいて淋しいと思わない？」

広川さんは、入院してもう一年になる。慢性肝炎と慢性腎臓炎なのだ。

「淋しくないと言ったら嘘になるでしょうね。でも、病気になる前からって、特別健康の時より淋しいということでもないですよ」

そう言っ広川さんは、手の指をボキボキと鳴らした。

「わたし、今日はへんに淋しいの。どうしてかしら」

「生きてるって、そんなものですよ。淋しい日もあれば楽しい日もある。いや、千香ちゃんの場合は恋人がいないからかな」

広川さんはにこっと笑った。いい笑顔だ。こちらの心をとまほし、微笑を誘う笑顔である。わたしはアンドレ・ジイドの「狭き門」を借りて帰った。民子さんは、もう準夜勤務で部屋を出ていた。

今夜は風だ。ガラス戸が時々鳴っている。

一月二十日 火曜 雪一日降りやまず

ゆうべ、うとうとと眠りかけていたら、準夜勤務を終えて帰ってきた民子さんが、いきなりわたしにとびついてき

た。

「どうしたの」

思わず飛び起ると、

「千香ちゃん、わたし、とうとう加沢先生とキスしちゃった」

と、うっとりした顔をしている。

「まあ」

加沢先生は、四十を過ぎた外科医長だ。皮靴をキュッキュッと、誰よりも音たかく鳴らして廊下を歩きぎな奴！「民子さん、あの先生には奥さんがいるんじゃないの。外科の山田婦長とだって、ミス外科とだって、噂がある先生じゃないの。どうして、あんな先生に……」

と怒ると、民さんは笑った。

「千香ちゃんは、まだ恋をしらないんだもの、この気持ちばかりはしないわ」

さくらんぼのような、つるりとした赤い唇をみつめていると、加沢先生のうすい薄情そうな唇が目に見え、腹立たしかった。

男と女って、一体何だろう。男の何に、女の何が惹かれるのだろう。わたしは清い恋をしたい。真実な恋をしたい。二度と繰返し得ない人生なのだ。悔いのない恋をしたいと思う。娯楽室のピアノの白い鍵盤を十五六本皿に盛って、カレーをどろりとかけ「召上れ」と加沢先生に食べさせたし。

二月一日 日曜 晴 寒さきびしい

準夜勤務。詰所で体温表の記入をしていたら、杉井田先生が入ってきた。

「あ、君が準夜なの」

なぜか先生は、ちょっと驚ろいたようにわたしの顔を見た。

「はあ、何か？……」

「いや、君の準夜とわたしの当直は、今までぶつかったことがなかったでしょう。だから……うれしかったんだ」

杉井田先生は、そういって、てれたように笑った。わたしは思わずドキンとした。こう言われてドキンとしなければ、ヘルツが故障していることになる。

杉井田先生は、髪をはらりと額に垂らし、いつも、愁いを含んだ目をしているのが（女性の目の表現みたいだ）魅力的だ。ちらりと見られるだけでも、胸がキュッと痛くなると、ナースたちや女の患者がさわいである。その先生に、こんなことを言われたということ、やっぱり素直にわたしはうれしかった。

「君のうちは、大きな食料品屋さんだってね。ご両親とおにきさん夫婦、二番目のおにきさんは東京、店には店員さんが五人もいる……」

杉井田先生はそう言って、わたしのそばの椅子に腰かけた。いつの間にそんなことを知ったのかと驚ろくわたしに、

「君は二十二才、趣味は読書と音楽でしよう？」

杉井田先生は、わたしの顔をのぞきこむように言った。

「まあ、そんなこと……」

「ぼくは、君に關してはいろいろと知っているよ。ただ一つ、君に恋人がいるかどうか、これだけはぼくにもわからないけど」

即座にいないと言おうとして、わたしはだまった。

こんな時に、どんな返事ができるだろう。わたしは、ごく平凡な女なのだ。これだけ自分に関心を持たれていると知っただけで、飛び上りたいほどうれしくなる、当り前の女なのだ。けれども、すぐにうれしそうな顔をするほど、無邪気でもない。わたしは多分、当惑したようにうつむいていたと思う。

「君は広川君と親しいらしいけれど……」

しばらくして、杉井田先生はポツリと言った。広川さんは恋人ではない。わたしはただ、あの人のそばにいたり、呼吸が楽になるのだ。心が安らぐのだ。でも、わたしはやはりだまっていた。杉井田先生は、何とも言えない淋しそうな目で、じっとわたしを見つめていた。

民子さんの寝息を聞きながら、ここまで書いて、わたしは何となくため息が出た。日記を書くように勧めてくれたのは広川さんだ。わたしは、今日までただ何となく書きつけてきた。けれども、何だか明日からは、何を書くのか恐ろしいような気がする。

恐ろしいとは何だろう。自分が恐ろしい。他人が恐ろしい。世間が恐ろしい。この恐ろしいという感情は軽薄なのだろうか。こずるいのだろうか。広川さんという人には、恐ろしいことがないような気がする。なぜだろう。

二月七日 土曜 雪

へあなたが口を開いて話すとき、そのことばは、沈黙よりも価値あるものでなければいけない」

とはアラビアの格言だそうだ。沈黙は金という言葉もある。多分、猛烈なおしゃべりな奥さんを持った男が、苦しまぎれにつくった格言にちがいない。

たとえ、その言葉が神様の言葉でも、今日のわたしは、黙っていることができないのだ。二十二才の女の子は、おしゃべりのほうがかわいいのです。

今日は病院のすぐそばの、札幌神社の裏で、恒例の職員スキー大会があった。でもわたしは日勤で行けなかった。大きな雪が、ふわふわ漂うように降る窓を眺めているだけだった。

夕方、宿舎に帰ったら、美佐ちゃんが部屋に遊びに来て言った。

「お千香、おごれよ」

美佐ちゃんは体重六十六キロ、身長一メートル七十。男性に劣らぬ体格のせいかな、男のような口をきくのだ。「どうして？」

「だってき、杉井田先生が西原千香子はきていないかって、あちこちで、きいていたっていうからさ」

美佐ちゃんは、わたしの肩をぐいとおつついた。民子さんも、

「みんなさわいでいたわよ。杉井田先生と西原さんは、そういう仲だったのかとか何とかって。同室のあなたが知らないなんて、ボンヤリねって言われたわ」

などと言った。

「知らないわよ、わたしだって」

わたしが困惑したように言うと、美佐ちゃんは、

「わかっているよ。杉井田先生が千香に熱を上げてるんだ。

千香は女のわたしでさえ、ほればれするような、きゅっとしまった体をしてるし、情熱のないマスクをしてるもん、無理ないよ。好きなら、突進しなよ。応援するよ、ね、お千香」

美佐ちゃんはその言うてから、じいっと、わたしの顔を見て、

「でもね、男ってなまずい動物だからね、気をつけるんだよ」

と言った。美佐ちゃんはい人だけれど、男を全然信用していない。あとで民子さんが、彼女多分手痛い失恋をしているのよ、と言っていた。

わたしは、つくづく、スキー大会に行きたかったと思う。わたしは高校時代、スキーの選手だったのだ。スキー

に乗ったわたしは、多分誰よりも魅力的な存在であったにちがいない。

ところで、わたしは、杉井田先生が好きなのだろうか。好かれたからといって、好きになるというのは、主体性がなさすぎる。あの先生のどこが好きなのだろう。あの、やや憂鬱そうな目だろうか。誰を愛するか。これは一生の一大事なのだ。人生は撰択なのだ。誰を選ぶかは一大事なのだ。

ちょっと分別臭く、そんなことを考えてみたが無駄だった。わたしは、多分、杉井田先生が好きになったのです。

二月十五日 日曜 快晴 珍らしく風なし

日直。

春の日ざしのようなあたたかい日が、どの病室にもいっぱいにさしこんでいた。医師たちはみな日曜で休み。杉井田先生も休み。

夕方、寄宿舎に帰ったら、珍らしく東京の兄からハガキが来ていた。

「ストープのそばで、ぬくぬくと過す札幌の冬がなつかしいよ。東京の冬は寒い。千香はスキーを楽しんでいることだろう。その暇もないかな。と、ここまで書いてハッと気がついた。やっぱり逆さに書いている。この頃よくやるんだ。こんな不注意な人間でも、プログラマーが勤まるんだから、ひどいよ。捨てるのもったいないからこのまま出

す。注射をまちがえるなよ。東京はひどい流感だ。千香もカゼを引くなよ」

ふっと、次兄に会いたいと思った。きょうだいっていいな。三人いても、四人いても、さぞいいだろうな。ハガキを逆さに書いても、斜めに書いても、何でもいい。兄っていいな。兄のハガキ一枚で楽しくなるなんて、安っぽい女でしょうか。

二月十六日 月曜 晴

「この頃、ちょっと、はなやかな噂があるわね、西原さん」

詰所にうがい薬をもらいに来た真野良枝さんが、好意ある微笑を見せながら言った。真野さんは、広川さんと家が近所とかで、親しい間柄なのだ。

「あら、そんな」

わたしは思わずあかくなった。噂って、いつもこうなのだ。本人が何も知らないうちに、話だけが大きく広がっていくのだ。

「西原さん、おいくつ？」

「二十二ですけれど、四月には三になるんです」

「二十三ねえ、わたしより十も下なのねえ」

真野さんは考えるように言って、

「結婚は急ぐことはないのよ」

と言った。どこか、広川さんに似ている人だ。広川さん

と結婚したら、きっとすてきなご夫婦になるだろう。

この頃何となく、わたしはうわずっている。日記は青春の記念碑だと広川さんが言った。日記の中で、じっくり自分を見つめなさいとも、言ってくれた。でも、わたしは自分から目を外らしたくなっている。目を外らしてふわふわしていたい。それもまた、青春の日の正直な姿なのだろうか。

二月二十八日 土曜 曇 あたたかし

五階でエレベーターに乗ると、思いがけなく、杉井田先生が一人だけ乗っていた。思わずわたしはあかくなった。

「帰るの、西原さん」

杉井田先生の手が、背にかかった。一瞬のことだった。が、エレベーターは三階でとまった。四、五人、看護婦や患者が入ってきた。人々の視線が、わたしの上に集まるのを感じた。平気でいようとしても、たった今、背に感じた先生の手の感触が残っていて、わたしはついうつむいていた。

地階でエレベーターを降りたら、うしろから名を呼ばれた。ふり返ると、ガウンを着た広川さんが、やさしい微笑でわたしを包んでくれた。うつむいていたので、三階で乗りこんだ広川さんにわたしは気づかなかったのだ。

「お買物？ わたしがして上げたのに」

「うん、この頃、少し動きたいんですよ」

広川さんは、売店のほうにゆっくりと歩いて行った。

誰もいないエレベーターの中で、いきなり人の背に手をふれるなんて、失礼ではないか。わたしは、そんな男性は好きじゃない。そう思いたいのだが、今も背中に、あの先生の手がおかれているような、ふしぎな感触が残っている。

わたし自身とは別の感情、肉体の感情があるのを、わたしは今日初めて知ったような気がする。あのエレベーターで、このまま、先生と二人で地獄まで降りて行ってもよいと思うような、甘美な大胆な感情が、わたしの中にあったような気がする。

民子さんは、夜、外出することが多くなった。時々、手鏡をじっと見つめていることがある。民子さんも、悩んでいるのだ。妻のある人などを愛してはいけないのに。

三月一日 日曜 うすぐもり 時々小雪

広川さんの病室に行く。わたしの顔を見ても、広川さんはしばらくだまっていた。

「どうしてだまってるの、広川さん」

尋ねると、

「だって千香ちゃんは、だまってそこにすわっていたんじゃないの」

広川さんは、かなしい程のやさしい微笑を見せた。その通りなのだ。わたしは、広川さんのベッドのそばに、じっ

とすわっているだけでよかったのだ。それにしても、広川さんって、恐ろしいほど人の心の動きのわかる人だ。

「わたしね、ゆうべ……」

杉井田先生のことを思っ、眠れなかったと、打ち明けてみたかった。けれども、さすがにためらわれて口ごもると、

「ゆうべ、よく眠っていないんでしょう」

広川さんは、何もかもわかっている。

しばらくして、広川さんは童話を話してくれた。星の子どもが、湖に光る星を見て、友だちになりたいと思った。そして、神さまにおねがいして下界に降りて来たら、それは自分の姿が湖にうつっていたという童話だった。

夜、九時すぎて民子さんが、外から帰ってきた。酒の匂いをおんおんさせている。オーバーも脱がずに、ごろりと横になって、

「あなたのかんだ小指が……」

と歌いはじめた。

「小指が痛い。親指も痛い。中指も痛い。五本の指がみんな痛い。うそ、うそ、痛くなんかありませんよーだ」

呆れてみているわたしを、民子さんは見上げた。きらきらした目だった。

「千香ちゃん、あんた、妻のいる人を恋してはいけないといっただけだ、どうして悪いの」

「あなたはいいと思っっているの」

「いいか、悪いか、そんなことわたしの行動の基準にはならないのよ。わたしにとって大事なものは、自分の感情に正直であることだけよ。好きなことを、わたしはしたいのね、千香ちゃん。わたしたちは若いよ。世の中に気がねなんかしてちゃだめよ。一日一日を完全燃焼させなくっちゃ。若い時は二度とないのよ」

民子さんは熱っぽく言った。今夜何かあったのだ。オーバーの下から出ているすらりとした民子さんの足の、靴下が少しよじれていた。

「でも、人間の世界には、していけないことって、あるでしょう」

「救われないなあ、千香ちゃんは。若さというのはね、立入禁止の立札があったら、その立札を無視して、立ち入ることなのよ。そんな立札をひっこぬくことなのよ」

「まあ」

「触れるべからずと書いてある陳列物には、触れてみる。それが若さの分別よ。若い者の分別は、大人の分別とはちがうのよ。自分の手でたしかめていくのよ。この世で反道徳的ということが、本当に悪いかどうか、挑んでみることなのよ」

「そんな生き方をしたら、傷つくだけじゃないの」

「結構よ、千香ちゃん。この世は戦いのよ。戦場のなのよ。戦場では、傷は名誉じゃないの」

民子さんはニヤッと笑った。今まで、民子さんはそんな

笑い方をしたことがなかったはずだ。わたしは黙って民子さんの布団を敷いてあげた。民子さんの話は、ひどく威勢のいい話だけれど、どこかがまちがっているような気がしてならない。

「いいこと、あなたも杉井田先生と、やけどをするような恋をしてね。祝福するわ」

民子さんはそう言って、布団の中でもそもそと着更えていた。

若さとは一体何なのだろう。誰かが、

「若さとは成長することである。何に向って成長するか、それが若い人の課題である」

と、何かに書いていた。

民子さんは何に向って成長するのだろう。成長というより突進のようだ。わたしは、何に向って成長するのだろう。わからない。悲しいけれど、何に向うべきか、わたしには明確な目標がわからないのだ。

三月三日 火曜 雨

今年のはじめての雨。煤けた雪をとかず三月の雨は、雨の中で一番いい。

夕方五時から、寄宿舎の広間でひな祭があった。おしる粉とちらしずし、そして白酒が出た。司会は美佐ちゃんだった。総勢百人余り。みんな白衣を脱いで、思い思いの服を着ている。わたしも指名されて、浜辺の歌をうたった。

歌い終ったとたん、

「よう！ 杉井田千香子！」

と、誰かがはやした。みんなどっと笑った。わたしは真つ赤になって壇から駆けおりた。

「お千香、ガンバレ。みんなで応援するよ」

司会の美佐ちゃんが大声でいうと、みんなが一斉に拍手した。

「あんたのこと、みんな祝福しているわよ。よかったわね」

民子さんが、自分のことのように喜んでくれた。

何ということだろう。わたしはまだ、杉井田先生とデートもしたことがないというのに、周囲では決定的な事実のように扱っているのだ。わたしは、何かほんろうさされているような気がした。

こうまで噂が広がってしまつては、デートさえしていない事実を誰が認めるだろう。何かひどく不安でならない。

三月七日 土曜 雪

日勤を終えて外出した。はじめて杉井田先生と肩を並べて街を歩いた。だまつて二人で歩いているだけで、生きていることはすばらしいと思う。ぼたん雪が静かに降っていた。降つては、三月の舗道に消えて行く。

二人で小さなレストランに入った。

「ぼくは母一人、子一人の家族でしてね。おやじは、ぼく

が大学一年の時に、突然脳溢血で死んだんです」

先生は、わたしのことをいろいろご存知なのに、わたしは驚ろくほど先生のことを知っていなかった。

「おやじは、商社の一サラリーマンでしたからね。もともと、金には縁がないんです。おやじが無理をして、大学に入れてくれたのですが、それがボカッと死んだものですから、おふくろも洋裁店に勤めたりして、苦勞したんですよ」

先生は、大学院に残りたかったが、経済的な事情で仕方なく、私立だがこの石狩病院に勤めたのだという。先生は、博士になりたいのだと言った。

「ぼくは博士になんかならなくてもいいんですが、やっぱり死んだおやじや、苦勞したおふくろのことを考えますとねえ」

杉井田先生の、幾分憂鬱そうなまなざしの原因がわかったような気がした。わたしは、先生を大学院で勉強させて上げたいと思う。わたしには、父から贈与された三十万円の定期預金のほかに、高校を出てから貯めた小遣いや、アルバイトのお金が八万円程ある。先生が必要なら、いつでも使つてほしい。

先生は、わたしを病院の近くまで送つて来てくださった。すっかり暗くなった病院の庭で、先生は立ちどまつた。顔が近々とすぐそばにあった。エレベーターの中で、わたしの背におかれた先生の手の感触が甦よみがえつて、わたし

は体を固くした。でも、先生はわたしの手をしっかりと握って、

「また会ってくれますか」

と言っただけだった。影のように立っている先生を、幾度もふり返りながら、わたしは帰って来た。

あたたかい夜だ。窓をあけて、わたしはぼんやりと三月の夜空を見上げた。ぼんやりと空を見上げるということも、この人生において、かなり貴重なひとときではないだろうか。

民子さんが生きてくれたのだろう。黄色い水仙が机の上の一輪さしに可憐だった。

三月十日 火曜 くもり

夕食後、美佐子さんの部屋に遊びに行ったら、厚い本を開いて、耳鼻科からこの頃内科に移った沢田柳子さんと何か話していた。沢田さんは、おしろい気のない知的な人だ。この人の白衣は、他の人よりずっと真っ白な印象を受けるのは、人柄のせいだろうか。

「河上肇っていう人は、父親について、何ひとつ悪い思い出を持っていないんだって。子供から見た父親なんて、欠点だらけなのが当り前なのねえ。これは、父親が偉かったのか、河上肇が偉かったのか、あなたならどっちだと思う？」

美佐子さんが言う、沢田さんがちょっと考えてから言

った。

「たしか、河上肇のおとうさんは、二度も離婚してるはずよ。それほど偉い人には思われないうわ」

「でも、それはね、河上肇のおばあさんが、きつかったからじゃない？」

河上肇については、京大の教授でマルキストだったぐらゐの知識しか、わたしにはない。二人は身近な人の話でもするように、かなり詳しく話し合っていた。

「準備の問題もそうだけど、配膳の小母さんたちの待遇だって、もっと真剣に考えるべきよ」

沢田さんはそんなことも言った。わたしや民子さんのように、自分の恋愛のことだけで胸が一杯というのはちがった、ひとつの青春をわたしは感じた。

人間にはいろいろな生き方がある。そう思いながら、黙って二人の話を聞いているうちに、美佐子さんが急にわたしに言った。

「お千香、栄養士の本間キヨ子さんのこと聞いた？」

本間さんは釧路から来ている、いつも濃厚な化粧をしている栄養士だ。口の悪い患者が、おかずがおしろい臭いと悪口を言っているけれど、院内で十指に入る美しい人だ。

「本間さんがどうかしたの？」

「何だ、まだ知らないの。杉井田先生に、この頃モーションをかけているっていう話じゃないの」

初耳だった。

「杉井田先生と、あんたのうわさが姦^{かん}しくなったんで、ジエラシーもあるかも知れない。お千香みたいな清纯派は、のんきで困るよ。まごまごしていたら、本間さんにあの先生をさらわれてしまうよ」

芙佐ちゃんはじれったがった。

柳子さんは、そばにあった本をばらばら開いていて、そのいかにも私的な生活には無関心だという態度が、わたしの心を惹いた。

「男って、気が多いんだからね。そうそう、気が多いといえば、民ちゃんが加沢先生と妙だっという話も聞いたわ。ばかだよ彼女は」

芙佐ちゃんは、音を立ててせんべいを食べながら言った。

三月十三日 金曜 晴

就寝前、民子さんと浴場に行った。民子さんの体が、少しやせたようだ。肌の色も少し黒ずんでいる。看護学校の生徒が五、六人入っていた。

白い湯けむりの中に、若い女が首を曲げて肩をこすった。ちよつと斜めに足を出して、ふくらはぎを洗っているのは、匂やかな美しさがある。けれども、画集でみる裸婦のような美しい人には、めったに会わない。

ふと民子さんが、わたしの背をつついた。
「なあに」

「きたわよ、きたわよ」

民子さんがささやいた。戸口のほうを見ると、栄養士の本間さんが、内股をきっちりと合わせてしとやかに入って来るところだった。少し胴長だが、小麦色のひきしまった体をしている。ただ顔だけが化粧で白いのが、妙にかなしい感じだった。

本間さんは、わたしを見るとハッとしたようだったが、ちよつと会釈をして、一番遠い隅のほうに行ってしまった。たしかに強敵だと思った。

生徒たちの話声が、浴場の中に賑やかに反響している。

「今日は十三日の金曜日よ」

「なぜ十三日の金曜日が悪いの」

「知らないわ。西洋の迷信でしょ」

「何でも、金曜日にキリストが十字架にかかったんですって」

「あんた、仏滅に結婚する？」

「仏滅もいいんじゃない。式場がガラガラですってよ」

わたしたち女の子の話は、結局は結婚と結びつくのだから。ひょいと本間さんのほうをむいたら、彼女の鋭い視線にぶつかった。

三月十九日 木曜 晴

昨日、一昨日の雨で、庭の雪がずい分とけた。詰所の花びんに猫柳がさされてあるのもうれい。また春がめぐっ

て来たのだ。

おひる休みだった。他の看護婦たちが食堂に行ったあと、詰所の窓から何気なく下を見おろすと、栄養士の本間さんが中庭に立っていた。陽を浴びているのかと眺めていたら、杉井田先生が通りかかった。わたしは思わず息をつめた。本間さんが嬉しそうに会釈をした。

杉井田先生は足をとめて、タバコに火をつけた。本間さんが何か言い、杉井田先生が首を横にふった。先生の白衣に何かついていたのだろうか。本間さんが口到手を当てて笑いながら、先生の肩を払ってやっている。

本間さんが小首をかしげて、庭の一隅を指さした。白い小さな猫が、日なたぼっこをしている。先生がそばに行つて猫を抱いた。本間さんが、先生の腕の中の猫をなでている。先生がひょいと腕時計を見た。本間さんが何か言つた。先生は二三度うなずいて、猫を本間さんに手渡し、向いの外科病棟の廊下に入つて行つた。

三階までは、二人の会話は聞えない。わたしは何とも言えないジェラシーを感じながら、聞えないはずの会話が聞えたような気がした。

「やあ、ここにいたの」

「ええ、先生がいらっしゃるのをお待ちしてましたの」

「まさか、そんなことはないでしょう」

先生が首を横にふる。

「あら、肩に何かついてますわ。あら、髪の毛ですわ」

「ありがとう。よく気がつくんだね」

「まあ、かわいい子猫」

「猫が好きな。じゃ、連れてきて上げよう」

わたしは、本当にそんな会話を聞いたような気がした。

一章

三月二十日 金曜 くもり

「孤独を愛する」

これほど大嘘で、また真実な言葉はない。けれども、孤独^{ソリタリ}ってふしぎな言葉だ。多くの人の心を惹く言葉なんて、崇高なのか、卑しいのか。何だか媚^メを含んだ女みたいな感じがする。

いまのわたしの気持をありていに言えば、昨日のひる休みに杉井田先生と栄養士の本間さんが、親し気に話していた姿が気になってならないという、ただそれだけのこと。何も孤独などという言葉を、意味深げに書くことはなかったのです。

三月二十一日 土曜 春分 雨

絹糸のような雨が降つて、一日裏の円山も煙っていた。

六号室に、服毒した青年が入院した。七転八倒どころではない。ベッドの上で百転百回の苦しみようだ。びんに白髪に見える小柄な母親と、ほっそりした姉らしい人が、お

ろおると涙を浮かべていた。

「結婚披露の案内状まで出してから、相手が妊娠しているとわかったのです。死にたくなるのも無理はありませんよ、看護婦さん」

準夜で、ずっと傍についていたわたしに、母親が言った。苦しさのあまりベッドから落ちそうになる青年を支えながら、その服毒した気持が、わたしには痛いほどわかった。

それにしても、どうして裏切った女が苦しまずに、裏切られた青年が、こんなに死ぬほどの苦しみをしなければならぬのだろうか。

三月二十二日 日曜 くもり

自殺未遂の大野さんは、今日はすっかり落ちついていて。とにかく助かったのだ。助かって、どんな人生が待っているのか、それはわからないが、しかし生きていることが大事なのだ。

「死ぬより辛かった」

と、大野さんは言った。澄んだまなざしの感じのいい青年だ。建築技師だというが、筋骨のたくましい人だ。そのたくましい腕に注射しながら、どんなに筋骨たくましい男性でも、わたしたち女性と同じように傷つきやすいものなのだと、しみじみ思う。

「あなたは、決して男を裏切る人間にならないでください」

い」

大野さんは、その澄んだ目をちかっと光らせて、真剣な顔になった。わたしは大きくうなずきながら、裏切られることはあっても、裏切る側には立つまいと思った。

消灯前、全部の病室を見廻る。広川さんの部屋をのぞくと、

「ゆうべは大変だったね」

とねぎらってくれる。あんなにドタンバタンと大野さんが苦しんだので、患者たちもみんな服毒事件は知っている。

「千香ちゃん。真実な人間ほど、裏切られるものかも知れないね」

広川さんが言った。

「どうして？ 真実な人がどうして裏切られるのかしら」
おどろくわたしに広川さんは言った。

「例えば、ここに非常に真実な人間がいるのでしょうか。つまり、誰もその人ほどには真実ではあり得ないんですよ。とすると、裏切るのは真実でない方で、裏切られるのは、真実な人間でしょう」

そう言われれば、そんな氣もする。

「神など、常に人間に裏切られ放しださうね」

神という言葉は、わたしには遠い氣がする。だが、その言葉を聞いて、わたしは広川さんが真実な人だという氣がした。

四月三日 金曜 晴 草青む

風がひと吹き吹いたら、はらりと落ちてきそうな、やわらかい青空。ことし初めて屋上にのぼる。雪のある間は忘れられていた屋上も、患者たちで賑わっていた。

札幌の街が、うららかな陽の下に輝いている。全くの話、街が輝くと思ったことなど初めてだった。裏の円山は、まだ茶がかつた紫に眠っている。芽吹きの前山も、おだやかでわたしは好きだ。

「そーらは晴れても、こころーは雨だーか。おい、全くいやになっちゃうな」

近くにいた患者が、松葉杖でいらいらとコンクリートの床を叩いていた。

わたしの心も晴れてはいない。本間さんと杉井田先生のこと、妙に心にかかってならない。

四月五日 日曜 くもり

朝、宿舎の洗面所で顔を洗っていると、芙佐ちゃんが来て言った。

「民子は定山溪^{じやうざんけい}に行ったんだね」

洗面所にはわたしたち二人だけだったが、わたしはあたりを見廻してから言った。

「ううん、定山溪じゃないわ。千歳^{ちとせ}の家に帰ったのよ」

「ふーん。昨日の夕方、駅前で見ただけなあ。発車寸前の定山溪行きのバスの扉を叩いてさ。やっと乗りこんだのを

見かけたよ」

「変ねえ。千歳に帰るって言ってたのよ」

「お千香。民子だって嘘ぐらいはつくだろうさ。都合の悪い時にはね」

芙佐ちゃんはニヤニヤして、髪にブラシをかけはじめた。

「でも、いやだわ。わたしに嘘を言うなんて」

「いいじゃないか。お千香だって、今に嘘をついて、どこかに誰かと出かけるようになるかも知れないよ。それにしても、民子もおちたねえ。加沢なんかにまるめられてさ」

芙佐ちゃんは、ちょっと黙ってブラシをかけていたが、

「民子は

ゆれて ゆれて

誰かの 腕の中」

と鼻うたをうたいはじめた。鼻うたを聞いていると、民子さんのことを悲しむ思いが、じーんと伝わってくるようだった。

わたしは、昨夜民子さんが、仕立上りのチェックのスーツを着、何べんも鏡の中をのぞきこんで出かけたことを思い出していた。あのかわいい桜んぼのような唇に、どきつい程口紅を塗って。

夜になって民子さんが帰って来た。

「やっぱり、家っていいものねえ」

わたしは知らんふりをして、ジイドの「背徳者」を読んで
いた。民子さんは黙った。ふり返ると、レインコートも脱
がずに、畳の上にべたりと横ずわりにすわっていた。

「千香ちゃん、わたし本当は家に帰らなかつたのよ」

民子さんは、もの悲しい程にかけた声で言った。

「知ってるわ。定山溪に行つたんですってね」

「あら知ってたの？ どうして」

「美佐ちゃんが見たんですって。あなたがバスに乗るとこ
ろを」

「まあ、いやだわ。美佐ちゃんに見られたの」

民子さんは、ちょっと身をよじった。変になまめかしい
身のこなしをする。背中にジンマシンができそうだった。

民子さんは、加沢先生の前でこんなふうにな身をくねらすの
だろうか。

「加沢先生と行ったの？」

「決まつてるじゃない。わたし、あの先生が好きなんだも
の」

ふいに開きなおるように言った。

「なぜ嘘を言つて行つたのよ」

「ばかねえ、千香ちゃん。あの先生と二人っきりの、誰も
知らない世界をつくりたいっていう気持、わからない？」

それが恋というものよ」

民子さんはうっとりとした目でわたしを見たが、レイン
コートを脱ぎ、マフラーをはずして、くるりと背を向け

た。

「ねえ、うしろの首のあたり、キスマークがついていな
い？」

うつむいて、形のいい首をのぼしてみせる。わたしは佻
しくなった。

「ついているわよ、二つも三つも」

「あーら、困つたわ。本当？」

うれしそうな声を上げ、鏡台の前で手鏡を合わせてい
る。首には何もついてはいないのだ。何だか民子さんは、
恋をして豚になつてしまつたようだ。

「地味のよい土地には雑草が生える」

という言葉もあると思いながら、わたしは民子さんを眺
めていた。

四月七日 火曜 晴

午後、氷枕の水を捨てに洗面所に行くと、沢田柳子さん
が広川さんの髪を洗っていた。患者の頭を洗うのはナース
の仕事だから、別にどうということもないはずなのに、わ
たしはふっと淋しくなつて入口で足をとめた。

今まで、広川さんの頭は大ていわたしが洗っていた。広
川さんも、わたしの洗い方はいいねいだと、いつもほめて
くれていたのだ。

わたしに気づかずに、二人は話し合っている。

「……そうよ、レニンだつて言つてゐるわ。ソビエットの

革命を、すべての国の理想のように見せかけるのは、こつ
けいだって」

「そうですね。そのレーニンの目が正しく社会主義国家に
受け継がれているか、どうか。そこが問題ですね」

むずかしい話を、二人は楽しそうに話し合っている。わ
たしは黙って、ぬるくなった氷枕の水をあけた。

「何だ、千香ちゃんか」

乾いたタオルで頭を拭いてもらいながら、広川さんがわ
たしを見上げた。

「さあ、これきれいなったわ。千香子さん、わたしも
う一人洗う人がいるの。広川さんを病室まで連れて行つて
くださる？」

柳子さんは、さっさと洗面所を出て行った。床に水滴一
つこぼしてはいない。柳子さんって、すばらしいナースだ
とつくづく思う。

広川さんは重病人じゃないけれど、血圧が低い。頭を洗
った時など、目まいを起すことがある。わたしは広川さん
について病室に行き、シーツをのばし、ベッドをととのえ
た。

「どうしたのです。泣き出しそうな顔をしていますよ」

広川さんはわたしの顔を見て驚いた。

「だって、広川さんったら、ほかの人に髪を洗ってもら
うんですもの」

わたしが言うのと、広川さんはわたしの顔をじっとみて、

「千香ちゃん、ぼくはね、これからいつも沢田さんに洗っ
てもらいますよ」

と言った。

「どうして？ どうして今までのように、わたしに洗わせ
てくれないの」

広川さんは何も言わずに、ベッドに横になって目をつむ
ってしまった。淋しかった。ちょうど同室の患者の佐藤さ
んが散歩から帰って来たので、わたしは部屋を出た。

四月十五日 水曜 くもり

風の激しい一日だった。

なぜか一週間程、わたしは日記をつけなかった。そして
この二、三日、

「わたしは死にたくまりました。みなさん、さようなら」
などと書いて、ふっと行方をくらましたい誘惑にかられ
ていた。本気で死のうとは思っていないのに、何という甘
ったれた人間だろう。もしわたしがこんな遺書を残して行
方をくらましたら、杉井田先生はどんなふうに心配してく
れるか、広川さんはどんなふうに嘆いてくれるか、美佐ち
ゃんや民子さんはどんなふうに驚いてくれるか、などと
想像してみるだけの、つまりは人々の注意をひきたいとい
うあわれな乞食根性！

それにしても、人間というものは、人々が自分の行為に
注意を向け、驚ろき、話題にしてくれるためなら（名譽の